

明和 6 (1769) 年の米沢城下と原方集落における 禄高別拝領屋敷地の分布 Distribution of Samurai's Given Residence by Allowance in Yonezawa Castle Town and Its Harakata settlements

小野寺淳*, 小橋雄毅, 渡辺理絵, 角屋由美子

Atsushi Onodera

茨城大学 教育学部, 水戸市文京

Ibaraki University, Bunkyo, Mito City

あらまし: 米沢は上杉家 15 万石の城下である。明和 6 (1769) 年「御城下絵図」(原方絵図を含む) に描かれた拝領屋敷地を屋敷データ, 上杉家中の身分と家禄を記した「御家中諸士略系譜」を属性データとし, 本報告ではおもに禄高階層別による拝領屋敷地の分布を考察する。なお, 家譜は上・中級家臣のみであるため, 「安永二年分限帳」・「寛政五年分限帳」を参照し, 「御城下絵図」記載の屋敷数 4345 ポリゴンのうち, 身分・家禄が判明したのは, 現時点で 34% (1491 家うち知行取 903 家) である。

Summary: Yonezawa is a castle town of Uesugi who has a territory of 150,000 goku. This paper considers distribution of samurai's given residence by allowance using 'On-jyoka-ezu' (including harakata-ezu) made in 1769 and 'On-kacyu-syoshi-ryakukeifu'. Because of 'On-kacyu-syoshi-ryakukeifu' only listed upper and middle class samurai's family trees, we referred 'Anei-ninen-bugencyo' and 'Kwansei-gonen-bugencyo'. There are 4345 samurai's residence polygons on the 'On-jyoka-ezu'. 1491 (including 903 chigyo-dori) out of 4345 polygons (about 34 percent) were determined their social classes and family's allowance.

キーワード: 米沢, 城下絵図, 武士, 1769 年, GIS

Keywords: Yonezawa, castle town pictorial, samurai, 1769, GIS

1. はじめに

米沢は上杉氏 15 万石の城下町である。置賜盆地の南東部, 松川(最上川)と鬼面川によって形成された扇状地の扇端に位置し, 東端は松川によって区切られていた。永禄年間, 伊達氏によって築城され, 慶長 3 (1598) 年には上杉氏の所領となった。当時の上杉氏は 120 万石で会津盆地の若松を本城とし, 会津盆地・福島盆地・置賜盆地を領有していた。しかし, 慶長 6 年には会津盆地を, さらに寛文 4 (1664) 年には福島盆地を召し上げられ, 置賜盆地 15 万石に減封された。にもかかわらず, 上杉氏は家臣の召し放ちを徹底することではなく, 会津・福島に配置していた家臣を, 米沢城下を中心に, 置賜盆地内に収容した。

米沢城下は本丸・二の丸を囲む内堀の外である三の丸を中心に上級・中級家臣の屋敷が割り振られ, 東側

の最上川近くに町人地を造成した。この町人地を取り囲むように, 城下の北・東・南の外縁部に寺社地を配置した(図 1)。

上杉家臣団の構成は複雑であった。上杉謙信と景勝の越後平定, 領国拡大の過程において, 越後, 北信濃, 北陸, 関東の在地領主らが上杉氏の家臣に召し抱えられた。彼らは上杉氏にとって外様ではあるが, 米沢藩においては上級武士に位置づけられた。また, 謙信の旗本は馬廻組, 景勝の旗本は五十騎組, 直江兼続の家臣は与板組に配属され, 三手組として中級武士とされる。会津 120 万石の時期には, それに見合う家臣数も必要であり, 新規に武士を召し抱えた。この時期に召し抱えられた武士の多くは, 与板組に属した¹⁾。

三の丸を拡張しても, 城下に収容しきれない下級武士は, 城下外縁部の在郷に集落を設け, 集住した。こ

れらの下級武士は原方衆と呼ばれ、現在も南原の一部には、当時の景観を彷彿させる原方衆の屋敷が残っている。原方衆は、荒地の開墾に従事し、半農半土としての暮らしぶりであった。

このような米沢藩家臣団の特殊性は、他藩にはみられない2つの特色を見出せる。1点目は、家臣の、城下と在郷という二元的配置であり、2点目は城下・在郷を合わせて3,661(明和期)を超える屋敷数の多さである。参考として宝暦5年(1755)の金沢城下における屋敷数は1,086であり、いかに上杉家中の屋敷数が突出していたかがわかる²⁾。

このような特色を有する米沢を対象に、本報告ではおもに城下および在郷における家中の禄高階層別による拝領屋敷地の分布を考察する。

2. 米沢城下絵図の選定

米沢の城下絵図類は26舗の現存が確認でき、これらの多くは米沢市上杉博物館と米沢市立米沢図書館で所蔵されている(表1)。この中から本研究では、No.15. 明和6年(1769)「御城下絵図」、No.16. 「諸奉公人屋舗絵図南原五町・六十在家・長手新田」、No.17. 「諸奉公人屋舗絵図花沢八町・山上三町・橋本町共」(以上、米沢市上杉博物館所蔵)の3舗を研究対象絵図に選定した。この理由は、以下の通りである。

先述のように、米沢藩は2度の大規模な減封を経ている。そのたびに、家臣の召し放ちを断行しなかったため、石高に比して武家地の面積が極端に突出する城下となった。下級武士は城下の東西南北に収容されたが、城下に収容しきれなかった下級武士は、在郷の原方集落に居住した。

このような城下町の構造は米沢藩特有のものである。400年を経た現在においても、町並みが観光エリアとなっており、なかでも城下南部の在郷に設けられた原方集落の南原では、谷地河原堤防(直江石堤)、ウコギ垣根の町並み、原方屋敷の景観が、今日でも残る人気の観光スポットである。

このような現状をふまえ、GISによる城下絵図の観光への活用を考慮した際、対象範囲は、米沢城下のみならず、原方衆の居住区までも含むことが不可欠と判断した。表1にみる現存する城下絵図の中で、原方衆の屋敷地が描かれる最初の絵図は、No.15, No.16, No.17である。これら明和6年に仕立てられた絵図は第9代藩主上杉治憲(鷹山)の養父第8代藩主上杉重定の命によって作成された。幕府や国目付への提出な

ど、城下絵図作成の明確な理由は不明であるが、明和4(1767)年に藩主となった治憲の米沢への初入部との関連が指摘されている。上杉鷹山の治世の城下を描くものでもあり、より興味深い。このような理由から、本研究では上記の3舗を研究対象に選定した。ただし、現存する米沢の絵図には測量図はなく、これら3舗もまた非測量図である。

3. 上杉家中の身分と家禄

上杉家中の身分と家禄を明らかにするためには、下記の3点が基本的な史料となる。まず、これらの史料が作成された経緯と記載内容を記述する。

1. 御家中諸士略系譜 個人蔵(米沢市上杉博物館寄託)

上杉家中、上・中級家臣448家の家譜である。初名・身分・家督・役職・禄高・出世・致仕・没年などが記されている。出世による加増で禄高の変遷が見られる人物もいるが、それは個人の働きによるもので、家督相続時にほとんどリセットされる。このため、このたびの付加情報としては家督相続時の禄高を採用した。

米沢藩では、4代藩主上杉綱憲の時代から記録方の手による家譜の編纂が始まり、家祖上杉謙信の年譜が元禄9年(1696)に完成して以来、最後の藩主上杉茂憲まで14代にわたり記録された。その過程で藩主家上杉家の系図の整備、家中由緒書の調査が進められた。『御家中諸士略系譜』は全20巻中、第2巻と第10巻を欠いているが、昭和54年(1979)に米沢温故会が翻刻刊行する際、「先祖書」「勤書」によってこれを補い、『上杉家御年譜』23巻・24巻にイロハ順で収録された。

2. 安永二年分限帳(上杉文書958) 米沢市上杉博物館蔵

分限帳は家臣団の名簿である。家臣の名前・禄高・役職・年齢等が記されている。会津120万石時代の慶長3年(1598)「会津御在城分限帳」から明治2年(1869)分限帳まで30余種を、米沢市上杉博物館と市立米沢図書館が所蔵している。選定した絵図は明和6年のものであったが、同年の分限帳が存在しないため近い年代の分限帳を採用した。記載順は、侍中座並・同組附・同家督年月・侍中本知本座・組離高家・奉行・江戸御家老・御城代・駿河守様御家老・郷村御用懸・御小姓頭・大殿様御小姓・御前様御伝役・奥御取次・御側衆・御膳番・御手水番・御小姓・御医師・御茶道・御小坊

主・大殿様御用人（後略）と、上・中級家臣の情報に留まり、下級藩士についての記述はなかった。

3. 寛政五年分限帳 米沢市立米沢図書館蔵

「米沢市史編集資料第1号」（米沢市史編さん委員会編1980）で活字化され、平成21年（2009）には人名索引も作成されて容易に活用できる。全家臣に加え、扶持を受ける寺社・女中まで、5,053件と豊富な情報を有する。しかし、明和6年より24年を経ており、合致する家臣名を多く得られなかった。

以上により、本研究では『御家中諸士略系譜』を基本史料とした。しかし、この家譜は上・中級家臣のみであり、下級家臣（猪苗代組・組外・組付の三扶持方以下）については記載がない。そこで合わせて「安永二年分限帳」・「寛政五年分限帳」を参考とした。

4. GIS 城下図の作成方法

(1) 絵図の幾何補正

No.15・16・17の絵図と現行の都市計画図を比較し、同一とされる地点をコントロールポイント（以下CPと呼ぶ）に設定した（図2）。城下域と原方地区に、合計104CPを設定した。幾何補正には、ArcGIS10.2.1のジオリファレンスツールを使用して幾何補正を行った。位置座標の変換は、絵図の直線性を保つため、アフィン変換を採用した。各絵図のアフィン変換による平均誤差値（以下RMSエラーとする）は、CP設置範囲の長辺を基準とし、城下中心部で約3.4%、城下東の原方が約4.1%、城下南の原方が約4.9%となった。

(2) 絵図ポリゴンの作成

都市計画図上に重ね合わせた絵図をもとに、武家地の屋敷割をトレースし、図1に示した凡例区分ごとにポリゴンデータを作成した。ポリゴンデータには、町ごとに3桁の番号を設定した。さらに、町の区画に対応した2桁の番号を設定した。2つの番号を合わせて5桁の番号とすることで、屋敷地の位置を識別することが可能である。

絵図に記載されている武士の氏名を分限帳で照合し、武士の氏名、身分、禄高、面積などの情報を、表計算ソフトで武士データとしてまとめた。ポリゴンデータと同様に、武士の氏名ごとに屋敷地の位置を識別できる5桁の番号を入力し、ポリゴンデータと武士データ

を結合する際の鍵とした。

ポリゴンデータと武士データを結合し、作成した総ポリゴン数は4,693で、このうち武士名の情報が入っている有効ポリゴンの数は4,538である。

5. 禄高別拝領屋敷地分布の考察

(1) 番組ごとの拝領屋敷の配置

一般的に藩の支配機構といえば、軍事機構（番方・番組）と政治機構（役方）の2系統が存在したとされる。番組は、いわば平時の常備軍であり、一般的に<番頭一組頭一組士>という結合関係を有した。これに対して、役方は行政や政務の職掌を司った³⁾。ただし、役方の人数は全家臣団の一部にとどまり、しかも家臣の相続や縁談、役職任免などについては、役方において事務処理がなさるのであるが、役職ある者についても番組の支配頭を通じて申請、伝達されるのである。したがって、番組と役方は完全に分離独立しているわけではなく、あくまでも家臣団編成と基軸は番組に重点がおかれた。

米沢藩においても、役方にあたる御近習衆や大小姓衆、中小姓衆、御右筆衆、奉行郡代年寄衆などは、それぞれの格にしたがって番組の中から任命されている。米沢藩における武士身分は、侍組、三手組（与板組、五十騎組、馬廻組を合わせた総称）、扶持方の3つの番組に分かれていた。享保9年（1724）の三手組の知行取人数は516名であり、享保10年の分限帳にみる知行取人数874名の6割を充当する⁴⁾。

三手組は、それぞれ最高支配役として「宰配頭」を1名置き、その直下に「三十人頭」を5名配置した。「宰配頭」は番頭に、「三十人頭」は組頭にあたる。三手組の組士数はおおよそ210~290名であるから、一人の「三十人頭」が50~60名の組士を管轄したことになる。各「三十人頭」の直下には、「百挺鉄砲組」や「足軽組」などが置かれた。

城下建設当初、家臣の屋敷は、有事の場合に備えて、同じ番組ごとに集めて配置したとされる。与板組は北部、五十騎組は西部、馬廻組は南部にあてがわれた。ただし、このような配置も、度重なる屋敷替えの結果、享保期ころまで徐々に弛緩していった⁵⁾。この半世紀後の明和期における番組の分布をみると、番組ごとの集住が保たれなくなったことが明らかである（図3）。

(2) 城下および郊外における屋敷の低密度

表2は、表1の各城下絵図にみえる屋敷および空き屋敷（絵図には明屋舗と表記）の数を算出したものである。屋敷数とは武士名が記載された地所のことで、御用屋敷や上・中・下屋敷は含んでいない。これによれば、元禄期の絵図に記載された屋敷数は2,675、享保期では2,442、明和期では2,425、文化期では2,382と元禄期をピークに城下町域の屋敷数に減少がみられる。さらに、空き屋敷数も、絵図にみる限り、増加の一途を辿っている。享保期では121、明和期では150、文化期では160、さらに弘化期では216であった。

上記の空き屋敷数に対して、GIS上で表記するため、空き屋敷の区画を1つと算出すると、米沢城下と原方集落の空き屋敷の区画の合計は444となる。その内訳は以下の通りである。

① 米沢城下町

武家地 3,231 明屋敷区画 238 明屋敷率 7.4%

② 東部原方集落

武家地 981 明屋敷区画 141 明屋敷率 14.4%

③ 南部原方集落

武家地 527 明屋敷区画 65 明屋敷率 12.3%

空き屋敷区画の発生は、三の丸内では北端の鷹匠町や関東町で見られるが、大半は三の丸外の西方、館山通に面した町で見られる（図4）。このような空き屋敷区画の発生は、原方衆の居住区でも確認（図5・6）でき、城下と在郷の原方集落双方で屋敷の低密化が進行した。

米沢藩は2度の減封に伴い、石高に見合わない家臣数を抱え、城下に収容不可能な家臣は在郷で生活した実情を考えれば、このような屋敷数の減少や空き屋敷の増加は矛盾するようにみえるが、米沢藩における藩内人口は元禄6年には132,189人、16年には127,062人というように減少しており、寛政5年（1793）の99,785人まで減少傾向が続く。城下町および原方衆の地区でみられた屋敷の低密化の動きは、武家地のみで捉えられるものではなく、米沢藩の領域人口の動きと合わせて理解されなければならない。

<注>

- 1) 伊豆田忠悦・小野榮・青木昭博（1991）：藩体制の成立。米沢市史編纂委員会編『米沢市史 第二巻 近世編 I』米沢市、111-197。
- 2) 矢守一彦『都市プランの研究 変容系列と空間構成』大明堂、295頁。
- 3) 柴田純「武士の日常生活」藤井譲治編『日本の近世第3巻 支配のしくみ』中央公論社、1991、275頁。
のちに、役方は番組をしのぐほど複雑化した機構を形成し、身分的な面で番組から役方が分離独立していく傾向が指摘される。米沢藩でもその傾向がみられる。鎌田浩「熊本藩の支配機構」森田誠一編「地方史研究叢書 肥後細川藩の研究」名著出版、1974、3-103頁。
- 4) 藩政史研究会「藩政史料調査報告」史学雑誌 68-1、1959、127頁。
藩政史研究会『藩制成立史の総合研究 米沢藩』吉川弘文館、1963、310頁
- 5) 渡辺理絵「米沢城下町における拝領屋敷地の移動—承応・元禄・享保の城下絵図の分析を通して—」歴史地理学 42-4、2000、23-42

<謝辞>

絵図の人名翻刻およびデータ作成に際し、植木伸子・佐藤由美子の各氏、山形県立米沢女子短期大学学生の協力を得た。英文要旨は茨城大学准教授大島規江先生に作成いただいた。記して謝意を表します。なお本研究は科研費補助金基盤研究(A) 課題番号 25244041 「GISを用いた近世城下絵図の解析と時空間データベースの構築」(代表者:平井松午)の成果の一部である。

表1 武家の居住を示した米沢城下町絵図および原方絵図一覧表

(2002年12月現在)

絵図名	推定年次	所蔵先	寸法(cm)	分類	記載範囲		公用図	備考
					城下	原方		
1. 往古御城下絵図	1640 (寛永17)	上杉隆憲氏蔵	22.0×131.2	城下絵図	○		●	
2. 御城下絵図	1653 (承応2)	国司侃氏蔵	111.3×96.3	城下絵図	○		●	国目付来訪のため(A)
3. 御城下絵図(万治年中)	1653 (承応2)	上杉博物館No.1874	177.0×134.7	城下絵図	○		●	国目付来訪のため(A)
4. 慶長六年米沢江御移国之上屋敷割図面	1653 (承応2)	窪島氏蔵	---	城下絵図	○		○	
5. 御城下絵図(元禄7年)	1682 (天和2)	上杉博物館No.1875	171.0×223.0	城下絵図	○		●	
6. 米沢城下家中絵図	1697 (元禄10)	上杉博物館 K 291-よ	194.0×119.0	城下絵図	○		○	
7. 米沢城下絵図(寛永17年)	1700 (元禄13)	栗野善雄氏旧蔵	---	城下絵図	○		○	
8. 旧米沢城下絵図	1700 (元禄13)	南陽市立結城記念館	230.0×262.5	城下絵図	○		●	元禄度国絵図作製に伴って(A・Y・W)
9. 町割図	1719 (享保4)	上杉博物館K 291-ま	137.0×163.0	城下絵図	○		○	
10. 米沢城下屋敷割図	1720 (享保5)	上杉博物館K 291-Y0	172.0×160.0	城下絵図	○		○	
11. 御城下絵図	1725 (享保10)	上杉博物館No.1877	205.0×278.0	城下絵図	○		●	巡検使へ提出のため
12. 御城下絵図(承応2年)	1725 (享保10)	上杉博物館No.1873	206.0×280.0	城下絵図	○		●	巡検使へ提出のため
13. 御城下町割略御絵図	1725 (享保10)	上杉博物館No.1880	117.0×147.0	城下絵図	○		○	
14. 御城下明細絵図	1766 (明和3)	山形大学附属博物館	204.0×260.0	城下絵図	○		○	
15. 米沢御城下絵図	1769 (明和6)	米沢図書館郷土本	199.0×272.5	城下絵図	○		●	大殿様所望につき(W)
16. 諸奉公人屋鋪絵図	1769 (明和6)	上杉博物館No.1882	116.0×186.0	原方絵図		○	●	大殿様所望につき(W)
17. 諸奉公人屋鋪絵図【南原五町、六十在家、長田新田】	1769 (明和6)	上杉博物館No.1883	88.0×59.5	原方絵図		○	●	大殿様所望につき(W)
18. 町割図	1780~1783	米沢図書館K 291-ま	129.0×142.0	城下絵図	○		○	
19. 諸奉公人屋鋪絵図【花沢、山上】	1811 (文化8)	上杉博物館No.1885	149.0×72.1	原方絵図		○	●	
20. 諸奉公人屋鋪絵図【館山通】	1811 (文化8)	上杉博物館No.1886	87.3×107.0	城下絵図	○※		●	
21. 御城下絵図	1811 (文化8)	上杉博物館No.1887	212.0×134.0	城下絵図	○		●	大火によるものか(A)
22. 御家中原々町割帳	1823 (文政6)	岩瀬家所蔵文書576	16.5×41.0 (帳面形式)	屋敷割図	○	○		組名が記載
23. 御城下並原々屋鋪割帳	1825 (文政8)	米沢図書館 K 291-1-2-1	23.8×32.6 (冊子形式)	屋敷割図	○	○	●	組名が記載
24. 御家中原々町割帳	1844 (天保15)	岩瀬家所蔵文書577	16.3×41.8 (帳面形式)	屋敷割図	○	○		組名が記載
25. 御城下並原々屋鋪割帳	1844 (天保15)	米沢図書館 K 291-1-2-2	23.8×32.6 (冊子形式)	屋敷割図	○	○	●	組名が記載
26. 御城下並原々屋鋪割帳	1846 (弘化3)	上杉隆憲氏蔵	23.8×32.6 (冊子形式)	屋敷割図	○	○		組名が記載

注：絵図名の()内は『上杉文書目録』に記載された作成年を表す。---は原本未調査を意味する。
 (市立米沢図書館編『上杉文書目録』、『郷土関係寄贈寄託文書目録』、『絵図でみる城下町米沢』より作成) 注：○※は城下の一部を記載。
 Y・矢守一彦「米沢城下絵図について―地図史的考察の試み」史林56, 1973, 285-303頁。
 A・青木昭博「城下絵図の伝来と作製年代」(財団法人米沢上杉文化振興財団編『絵図でみる城下町米沢』米沢市立上杉博物館, 1992) 33-39頁。
 W・渡辺理絵「米沢城下町における拝領屋敷地の移動―承応・元禄・享保の城下絵図の分析を通して―」歴史地理学42-2, 2000, 23-44頁。
 (渡辺理絵, 2008より転載)

表2 城下町・原方衆地区における屋敷数と空き屋敷数

	屋敷数※1		明屋敷	
	城下町域	原方衆地区	城下町域	原方衆地区
元禄期(No.8)	2,675		—	—
享保期(No.11)	2,442		121	—
明和期(No.15-17)	2,425	1,227	150	135
文化期(No.19-21)	2,382		160	118※2
弘化期(No.26)	—		216	—

No.は表1の絵図に対応。・※1明屋敷を含まず※2城下東方の花沢地区のみ、南方は絵図なし。—は不明

(渡辺理絵作成)

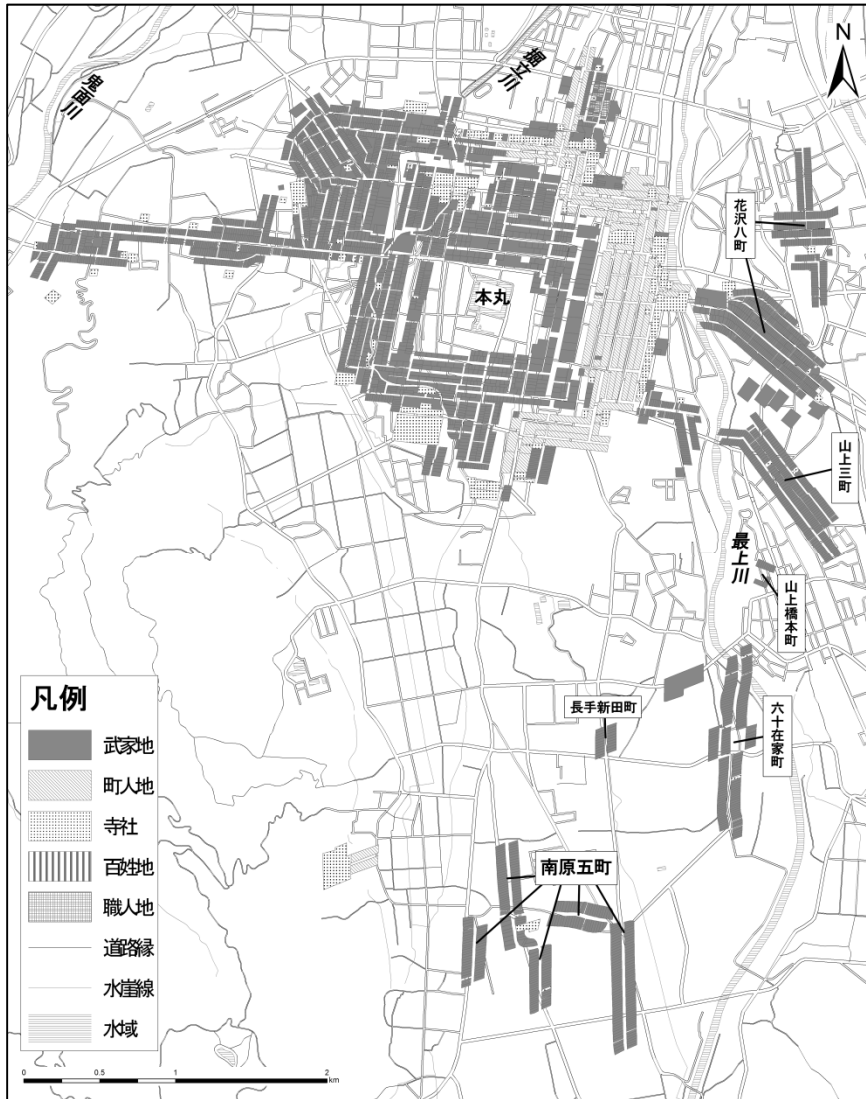


図1 米沢城下の階級区分図 (小橋雄毅作図)

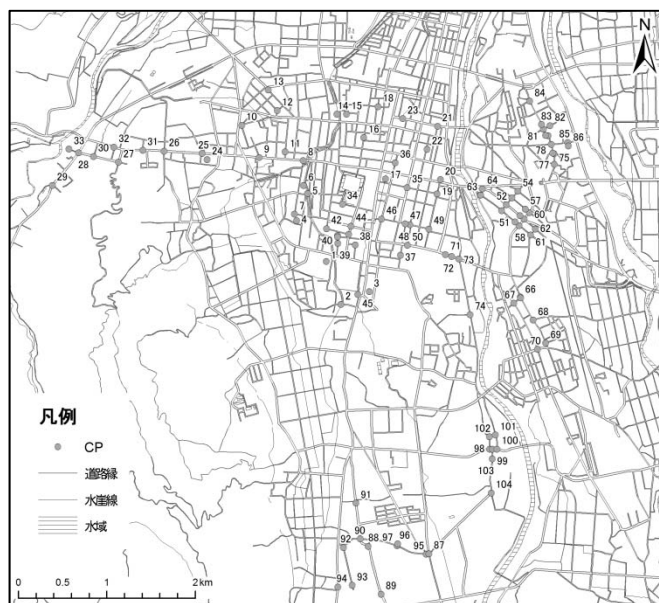


図2 CP 分布図 (小橋雄毅作図)

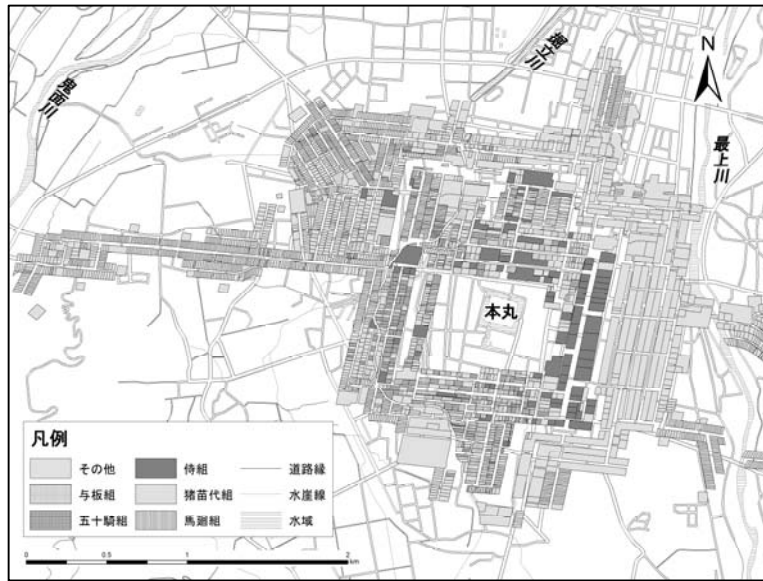


図3 番組ごとの武士居住状況

(小橋雄毅作図)

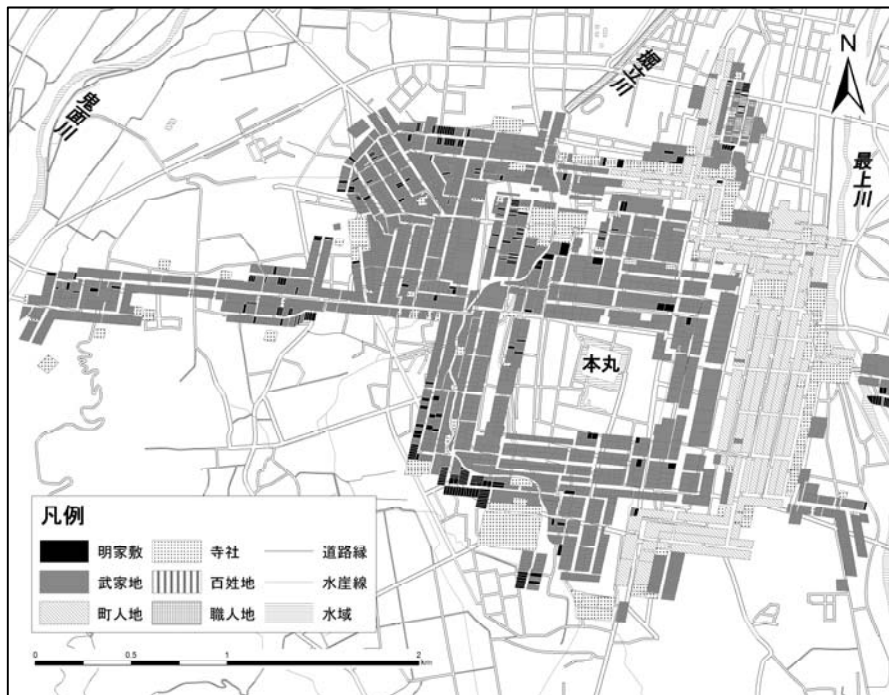


図4 米沢城下町中心の明屋敷区画分布図

(小橋雄毅作図)

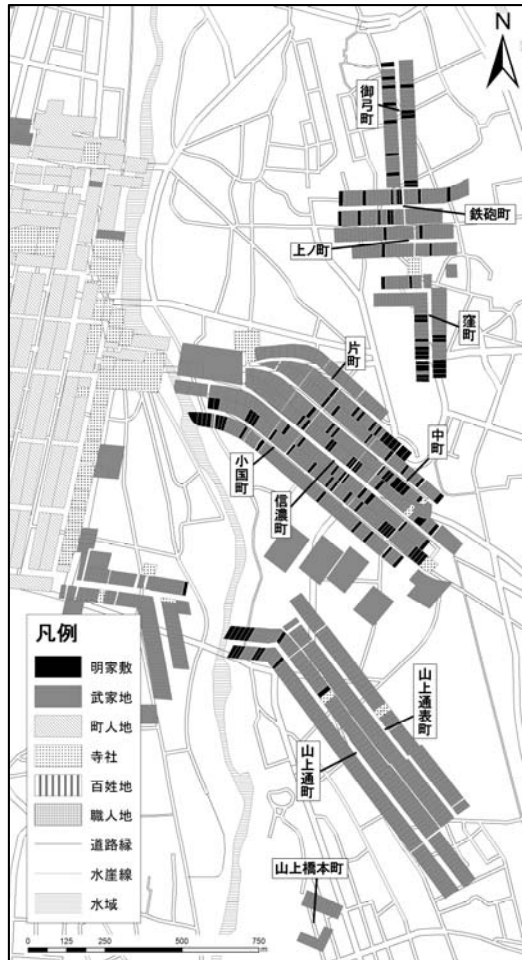


図5 東部原方集落地域の明屋敷区画分布
(小橋雄毅作図)

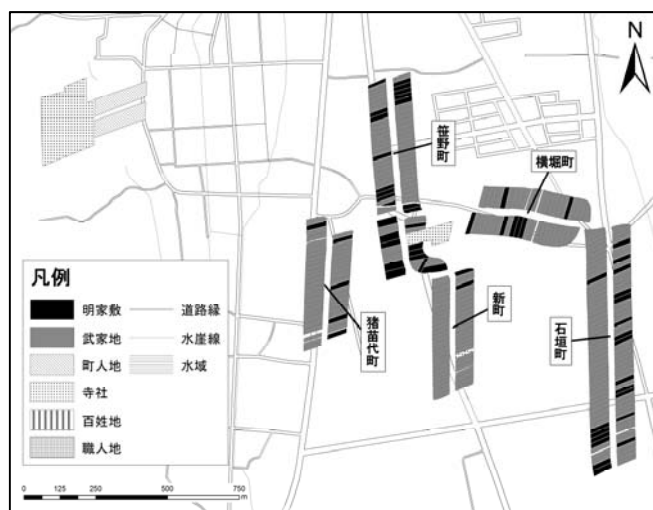


図6 南部原方集落地域の明屋敷区画分布
(小橋雄毅作図)